

歯科衛生士学科研究会講演抄録

において、従来の方法に比べ有効な漂白剤として注目されている。自験例 2 例は 68 才、女性の加齢による黄ばみと 49 才女性の歯の変色に対する漂白である。結果は、患者の審美的満足が得られ本剤の有用性を臨床症例にて確認できた。今後は自験症例の予後経過を追い、第 1 選択肢として日常臨床に生かしていきたい。

第 28 回：9 月 9 日（木）

開発歯ブラシの紹介

新井 俊二 教授

歯科医師 8 名、歯科衛生士 15 名、計 23 名を対象に、試作歯ブラシ 3 種類と市販歯ブラシ 1 種類を均等に 1 ヶ月間使用してもらい、歯ブラシの形態と機能性について使用経験を調査した。更に特定歯ブラシとブラッシング方法による清掃効果を検討した結果について述べた。

第 29 回：9 月 30 日（木）

デンチャープラーク・コントロールの現状と課題

松本 直之 教授（技）

これまでのデンチャープラークコントロールは齶触や歯周病、義歯性口内炎などの防止を目的としたものであったが、近年、高齢化社会を迎え、口腔内細菌と全身感染症との関係からデンチャープラークコントロールに対する取り組み方もより総合的な口腔管理の 1 つとして取り扱われるようになってきた。今回は、一般細菌ならびにカンジダ等の真菌、HBV、HIV 等のウイルスに対して殺菌、殺ウイルス効果がある強電解水を用いて義歯洗浄を行った場合の殺菌効果並びに洗浄方法について報告した。

第 30 回：10 月 14 日（木）

口腔粘膜にも性周期があった

福島 祥紘 教授

歯科衛生士学科 2 年生計 9 名に、2～3 ヶ月間にわたり、各自の基礎体温計を毎朝計測し、同時に起床時の無刺激混合唾液の塗抹標本作製してもらい、1 週毎に染色とデータを集計した。基礎体温から排卵期を推定し、夫々卵胞ホルモン及び黄体ホルモン分泌期と、塗抹標本結果（剥離上皮細胞の数と種類、白血球、細菌コロニー数）とを比較した。その結果、9 名中 8 名

に月経後数日以内に著るしい剥離上皮数の減少を認めた。その意味について述べた。

第 31 回：10 月 28 日（木） セミナー

語彙ラーニング・ストラテジー

広瀬浩二 助教授

Oxford, R. L. & Scarcella, R. C. (1994) の論文 Second Vocabulary Learning Among Adults : State of the Art in Vocabulary Instruction System, 22(2). 231-243. に則った「文脈から隔離した」「部分的に文脈のある」「完全に文脈化した」の 3 つの学習法である。

NaF-induced G₀/G₁ arrest of child gingival cells in culture associated with necrosis rather than apoptosis by an overdose.

小黒 章 教授

フッ化ナトリウム (NaF) が抗う蝕性を発揮する機構については長い研究の歴史があるが、高濃度の NaF が組織細胞に及ぼす影響については注意が払われていない。これは安全で適正なフッ化物応用にとって不可欠な事柄である。小児歯肉培養細胞に、10, 25, 50 ppm の NaF を 24 時間作用させた。G₀/G₁ アレストの増加と共にネクロシス細胞の増加が認められ、一方の細胞死であるアポトーシス細胞の増加は認められなかった。

第 32 回：11 月 11 日（木）

小児の歯の外傷

小野 博志 教授

乳歯と幼若永久歯の外傷の疫学的特徴と、とくに留意を必要とする症状への対応について長期観察結果を基に述べた。すなわち、乳歯の受傷は 3 歳以下の幼児に多く、しかも低年齢児ほど埋入症例が多い。感染予防処置と経過観察によって好結果を得ることが出来る症例のあることを示した。幼若永久歯では歯冠破折の頻度が高くなるが、歯髄を保存し、歯根形成を進ませることが最も重要な課題である。断髄処置の有用性と長期予後観察の重要性を述べた。また脱臼を伴いやすい歯根破折への対応法と予後について述べた。